

タイ語教育スタンダード化に向けての効果的な CEFR 導入の検証

Effective application of CEFR toward the standardization of the Thai language education curriculum

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤)
Sunisa Wittayapanyanon (Saito)

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies (3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo 183-8534, Japan)

要旨: 本稿は、タイ語教育スタンダード化に向けて、CEFR を効果的に適用するために考慮すべきタイ語特有の課題を示している。まず「外国語としてのタイ語教育」の現状やスタンダード化に向けた動き、東京外国語大学におけるタイ語カリキュラムの CEFR 参照分析結果を示している。CEFR を効果的にタイ語教育に適用していくためには日本語母語話者の特性も十分に加味しつつ、声調などの音韻体系や独自の書記体系といったタイ語特有の言語的特質を織り込まれた包括的なカリキュラムが必要となる。加えて、タイ語特有の社会・文化的特質も考慮する必要がある。タイ語特有の社会・文化的特質は、(1)社会的立場の確認、(2)距離を縮める、(3)配慮表現、(4)コミュニケーション・ストラテジー、(5)文体の違い、という5つの特徴に分類出来ると本稿では提示している。

Abstract: This study deals with issues specific to the Thai language, in facilitating the effective application of CEFR (the Common European Framework of Reference for Languages) toward the standardization of a curriculum for Thai language education. This paper presents the current status of “Thai language education as a foreign language,” issues related to its standardization, and the evaluation of the Thai language curriculum at the Tokyo University of Foreign Studies, based on the CEFR reference framework. In order to apply CEFR effectively to the Thai language curriculum for Japanese learners, a comprehensive curriculum would be required for incorporating the features of Japanese learners and linguistic elements specific to Thai, such as a phonological structure including tonal distinction, and the Thai writing system. Further, social and cultural elements specific to the Thai language should also be incorporated. This study reveals five features as social and cultural elements specific to the Thai language. These features are: (1) confirmation of social position, (2) building of closer relationships, (3) expressions of consideration for others, (4) specific communication strategies, and (5) stylistic differences.

キーワード: 外国語としてのタイ語教育、CEFR、タイ語教育スタンダード、
タイ語特有の社会・文化的要素

Keywords: Teaching Thai language as a foreign language, CEFR, Standard Thai language teaching methodology, Social and Cultural element specific to Thai language

1. はじめに

2002 年タイ外務省調べによると、ノンフォーマル教育、プライベート学校、生涯教育などを除いた世界の高等教育機関でタイ語、東南アジア研究、タイ研究なども含めタイ語教育を行っている機関は、114

ヶ所ある。2015 年末の ASEAN 経済統合体の発足による地域社会の変化、具体的には人の活発な交流による複合社会化により、タイでは人材の育成方法、つまりは語学も含めた教育が見直されている。これまでは観光や一定レベル以上のビジネスパーソン間でのコミュニケーションは英語で十分であったが、今後は単純労働者も含めた幅広い層で国境を越えた人の動きが予測される。そういった環境下では、英語だけではタイ社会として対応することは難しく、外国人へのタイ語教育が重要となり、近年「外国語としてのタイ語教育」に注目が集まっている。その点については、タイ政府も認識しており、2015 年 5 月、タイ教育省高等教育局（Office of the Higher Education Commission, Ministry of Education）がタイ語教育に関する国際会議を開催し、筆者も含め、ASEAN+3（日中韓）の大学等でタイ語教育に携わる関係者が参加した。当会議では「外国語としてのタイ語教育」が重要課題として設定され、多くの参加者から、タイ国内における国語教育の延長ではなく、「外国語としてのタイ語教育」の枠組み、スタンダードを必要とする意見が多く挙がっていた。しかしながら、「外国語としてのタイ語教育」のスタンダード化については、推進の基盤となる組織がなく、先行研究も十分と言える状況ではない。そこで、「外国語としてのタイ語教育スタンダード化を研究するに当たって、ASEAN 経済統合体による地域社会の変化は、EU と類似している状況であるため、ヨーロッパ言語共通参照枠組み（Common European Framework of Reference for Languages：以下、CEFR）を、「外国語としてのタイ語教育」へ効果的に適用し得るものかを検証することが有効な手段の 1 つであると考え。

本稿では、「外国語としてのタイ語教育」の現状とともに、タイ語教育へ CEFR を適用するに当たっての課題、特に日本人学習を対象とした課題について述べる。

2. 外国語としてのタイ語教育

タイ国内 6 大学で行われた「外国語としてのタイ語教育」に関する調査（Chairerk 2010）によると、調査対象大学のタイ語教育については、プログラム管理者の「外国語としてのタイ語教育」のプログラム・マネジメント経験が不十分である、プログラム設計者と利用者間でのカリキュラムに対する共通理解が不十分で、学習者にとって難易度が高いカリキュラムとなっている、指導者の「外国語としてのタイ語」教授経験が不十分である、指導者各自で学習計画と教材を準備する必要があるため、指導者の負荷が大きく、またそれにより個々人の裁量に依存することになっているため、教育レベルにバラつきが見られる、といった結果であった。この調査結果からも、「外国語としてのタイ語教育」には、統一した指針、基礎となるカリキュラムが必要であることが伺えるが、タイ国内には未だ言語学会やタイ語教育学会も存在せず、言語学者によるタイ語の理論的研究とタイ語教師によるタイ語教育の実践を強く結びつけるものが何もない状態である（高橋 2014）。

このような環境ではあるものの、タイ語教育のスタンダード化に向けては、いくつかの動きも見られる。まず、2016 年 5 月に発表されたノンフォーマル教育向けカリキュラム基準である。これは教育省非正規教育局（Department of Non-Formal Education, Ministry of Education）が作成しており、1997 年版からの改訂となり、表 1 は初級カリキュラムの概要となる。日常生活といったレベルの定義が曖昧であることや、日本語母語話者をはじめとした一部の外国人のタイ語学習者にとって、大きな課題である発音や聴解のレベルに関しての言及がないなどの課題はあるが、各レベルの学習時間、目的、学習内容、評価方法などが示されている。

【表 1：ノンフォーマル教育向け 初級カリキュラム（教育省非正規教育局公開資料より）】

学習時間	120 時間（3 month+3 week）	対象者	15 歳以上
目的	1. タイ語の初級レベルの知識と理解 2. 初級レベルのタイ語が使える 3. タイの文化、及びタイ語に対しての親近感・好感度醸成 4. 日常生活、または進学のため		
学習内容	1. タイ語の基礎知識（24 時間） タイ文字とその仕組み（子音、母音、声調）、数字/数え方 など 2. 日常生活に使う基本的な単語と文章（48 時間） 単語の種類と役割、語順、類別詞、丁寧語、文の種類（疑問文、否定文、依頼文） など 3. 日常会話（40 時間） 挨拶、自己紹介、時間、年月日、季節、方向、位置、食事、買い物/値段の交渉、電話での会話 など 4. タイの文化・習慣（8 時間）		
評価方法	出席率：80%以上、講義 30%+実践 70%、合格 60%以上		

要約/翻訳：スニサー ウィッタヤーパンヤーノン

また、タイ語の能力を測る検定試験については、教育省やチュラロンコーン大学など、いくつかの機関が主催・実施しているが、それぞれ独自の方法と基準に基づいて試験を行っているというのが実態である。教育省の試験では、聴解、読解、作文、会話といった 4 つの能力テストを行い、4 つのテスト結果を総合して、総合能力を判定している。一方、チュラロンコーン大学の試験では、聴解、読解、作文、会話の能力毎に試験を行い、それぞれのレベルを判定している。チュラロンコーン大学の検定試験のレベル分けでは、表 2 の通り、CEFR との比較基準も示されているものの、CEFR の特徴でもある具体的な Can-Do Statement までは示されていない。

【表 2：チュラロンコーン大学 タイ語能力検定試験評価レベル】

レベル		CEFR
特級 (Distinguished)	D	C2
超上級 (Superior)	S+	C1
	S	
上級 (Advanced)	A+	B2
	A	
中級 (Intermediate)	I+	B1
	I	
初級 (Novice)	N+	A2
	N	A1

レベルの「+」： 各レベルの基本能力以上はあるが、安定した運用がなされておらず、上のレベルには至らない状態を示す。

要約/翻訳：スニサー ウィッタヤーパンヤーノン

他にも、多様な分野の職業基準策定を行っているタイ専門職資格認定機関（TPQI、Thailand Professional Qualifications Institute）が主導し、外国人を対象としたタイ語教師に関する資格の新設を決定し、2017 年 9 月より検討が始動、といった動きもある。

一方、日本でのタイ語教育では、大阪大学が外国語学部全体の動きの一環として CEFR を参考にした能力指標の設定を各国語で行っている。そこで CEFR を用いることは必須ではなかったため、タイ語では結果的に CEFR の到達度レベルに対応する記述は見られないが、発音と文字に配慮したタイ語の特性を踏まえた到達目標が設定されている点が注目すべき点である。

なお、タイにおける CEFR 活用の試みは、大きく先行しているのは英語となる。ASEAN の経済統合体発足による社会変化に対応すべく、英語教育に抜本的な改革を織り込んだ政策が、教育省基礎教育委員会事務局（Office of the Basic Education Commission, Ministry of Education）から 2014 年に打ち出されており、その政策の中では、CEFR に基づいた英語教育を行っていくことが明確に示されている。例えば、

学年別の能力達成目標も、CEFR 式に示されている他、カリキュラム内容としても、コミュニケーション能力の向上に重きを置いているのも大きな特徴となっている。また、日本語についても国際交流基金バンコク日本文化センターにより、タイ中等教育向け教材『あきこと友だち』と連動させ、JF 日本教育スタンダードに基づく Can-Do での目標設定等をプログラムに導入するなど、CEFR を活用した動きもある。タイにおいて、CEFR と関連した動きがあるのは、英語と日本語のみで、タイ語に関してはほとんどない状況である。

3. CEFR を参照した東京外国語大学でのタイ語教育の現状

次に東京外国語大学タイ語カリキュラム、今回は特に使用教材を分析し、能力別に CEFR での到達度レベルの検証結果について、見ていくこととする。

スニサー（2017a）で行った分析結果は、表 3 の通りとなるが、まず注目すべき点としては、各年次とも能力別の到達度レベルにおいて、最大で 2 段階の差が発生している点である。1 年生時の「書くこと」が他の能力に比べ到達度が低い、これはタイ文字の学習時間やその後に続くカリキュラム構成などが影響していることが考えられる。1 年生春学期ではタイ文字の仕組みを集中的に学習するものの、秋学期には「書くこと」に焦点を当てた授業がない状況となっている。

【表 3：東京外国語大学 1～2 年生タイ語授業全体カリキュラム CEFR 参照到達度】

	理解すること		話すこと		書くこと		全体的尺度
	聞くこと	読むこと	やり取り	表現	書くこと		
1 年生	A2	B1	A2	A2	A1	→	A2
2 年生	B1	C1	B1	B1	B1	→	B1

また、到達度の進捗を見ると、1 年生から 2 年生にかけて「聞くこと」や「やり取り」、「表現」の伸び率が小さいのとは逆に「読むこと」の伸び率が大きいという点も着目すべき点である。これは各能力を伸ばすための学習方法に起因するものと考えられる。「聞くこと」や「やり取り」、「表現」能力においては、一定レベル以上では、コミュニケーションの相手が必要となることに対し、「読むこと」は相手がなくても、能力を高めていくことが可能であり、そういった各能力の学習方法に関する特性も踏まえた全体カリキュラムの編成が最終的には必要とされる。

他にも教材に関する課題も見出すことが出来る。多くの授業で共通して使用されている基本教材の中には、具体的な学習到達度目標が明示されていない他、基本教材以外のオリジナル教材について、適宜アップデートしながら、都度準備するため、指導者間で各授業における学習進度を可視化し、各能力レベルの到達度の進捗を共有化することが困難な状況となっている。そして、教材だけでなく、カリキュラムとして包括的かつ客観的な到達度目標がないことにより、段階に応じた適切な学習内容が不明瞭となり、学習者が客観的に自分のできること、できないことを正確に把握することが困難となり、指導者も学習者の到達度に応じた効果的な指導を行うことが難しい状況となっている。

今後の課題としては、各段階における個々の能力、及び全体の能力到達度レベルの最適化を図り、かつ教材や授業における客観的かつ具体的な到達度目標設定がある。そのためには、具体的な到達度目標と効果的な教授法が示されている総合的なカリキュラム、教材を開発する必要があるが、そこには、単に CEFR をカリキュラムに形だけ落とし込むのではなく、タイ語の特性や日本人学習者の特性も十分に反映することが肝要である。

4. 日本での CEFR 導入におけるタイ語特有の課題

4.1. 言語的特質

言語的特質という点では、東京外国語大学カリキュラムの分析結果からも一部明らかになった通り、タイ語の音韻体系やタイ文字といったタイ語独特の言語的特質を十分に検討する必要がある。タイ語は、日本語とは全く異なる音韻体系で、かつタイ文字についてはその音韻体系を十分に理解していないと、効果的に学習することは望めない。これは基本的にはアルファベットで構成される欧州言語を学習する手順とは大きく異なるものであり、これらの点をいかにタイ語教育のカリキュラムに系統立てて反映させるかが重要となってくる。

4.2. 社会・文化的特質

タイ語に限らず、外国語を正しく運用するという点では、単に言葉の知識だけではなく、その言語社会における適切な文脈の中で、言葉を運用していくことが必要である。そのためタイ語教育に反映すべきタイの社会・文化的特質に関する考察も必要となる。スニサー（2017b）で行った考察方法としては、「TUFS 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」で使用された“アジア諸語の社会的指標アンケート”の 22 項目（富盛、YI 2017）を、タイ語において検証を行うとともに、22 項目ではカバーし切れていないタイ語特有のコミュニケーションに関する社会・文化的要素を参考文献にある各種論考を参照し、22 項目以外にも加えるべき項目を抽出、分析を行い、結果として 15 項目を加えている。計 37 項目について、タイ語でのコミュニケーションでの社会・文化的特質に合致するものか、つまりはタイ語の教育現場で能力レベル測定の指標とし活用できるかの検証を行い、活用できるものについては、タイ語としての例示的能力記述と CEFR での能力度達成レベルを提言している。能力度達成レベルについては、東京外国語大学タイ語専攻の授業で使用している教材について、スニサー（2017a）の分析結果を主に参照している。

今回の分析結果では、タイ語の社会・文化的特質としては、大きく 5 つの特徴に分類することが出来た。

4.2.1. 社会的立場の確認

タイ語では、相手の年齢に応じて、一人称や二人称が変化する他、職業などの社会的立場に基づく相手との関係性に応じて、言葉遣いや行動にも変化が生じるため、相手と自分の関係を適切な方法で明らかにし、その関係性に合った行動をそれぞれ行うことは、タイ語においては極めて重要な要素である。この確認行為は、タイ語社会の対人コミュニケーションでは、初期段階で求められる行為であるため、参照した教材をみると A1 レベルに織り込まれている内容となっている。

【表 4：タイ語特有の社会・文化的要素①：社会的立場の確認】

*能力記述項目に入れる妥当性

言語行動・話題化	妥当性*	考察	CEFR 難易度	Descriptors
相手の年齢を聞いて確認する	妥当	タイ語の特徴として、相手の年齢に応じて、人称代名詞（一人称、二人称）を変化させる必要がある他、言葉遣いや行動も変化する。また、単純に年齢を聞くだけでなく、相手との関係性によって、卒業年、誕生年、干支等、聞き方を変えることもある。	A1	相手の年齢を聞いて確認できる。
学歴・出身校などを尋ねる	妥当	同窓の場合、仲間意識、共感が強まり、それによって付き合い方や言語行動（人称代名詞、終結小辞）などが変わる。学歴も相手との距離感を形成する上で大きな影響を及ぼす。	A1	相手の学歴・出身校などを聞いて確認できる。
相手の社会的地位	妥当	社会的地位、特に職業については、適切な呼称のために必要。収入についても、自分と相手との相関関係を確認するための手段の1つとして聞くことも多い。	A1	相手の社会的地位（職業）を確認できる。
相手の親の職業、親の収入など	妥当 (一部)	相手の社会的立場を確認するための一手段として、聞くことがある。但し、親の収入を聞くことまでは稀。	A1	相手の親の職業などを確認できる。

4.2.2. 距離を縮める

「距離を縮める」ことは、タイ社会では非常に重要な要素であるが、その代表例として、タイ人の愛称がある。ほぼ全てのタイ人には生まれた時に本名とともに授けられる愛称がある。タイ人の愛称は、簡単に変えるものではなく、ほぼ一生同じ愛称を使用し、かつ特有の集団でだけ使用されるものではなく、家族から職場まで、親しい間柄では共通して使用されている。愛称を使うことが、相手との距離を縮める第一歩となり、タイでは愛称を使用しないことで距離感を感じ、信頼を得られないということもあり得る。他にも表 5 に示されている項目は、タイ語コミュニケーションの基盤となる要素であることから、A1～A2 レベルでの習得が求められ、参照教材においても、その範囲で学習できるものとなっている。仏教に関連する表現も、自立した言語使用者となる B1 レベル以上では習得する必要はあるものと考えられるが、今回参照した教材では、仏教に関するテーマについては見られなかった。一方、タイ語社会において、注意を要するのは、政治、王室の話題であり、明確に相手の立場が分かるまでは、安易に話題とするべきではない。

【表 5：タイ語特有の社会・文化的要素②：距離を縮める】

*能力記述項目に入れる妥当性

言語行動・話題化	妥当性*	考察	CEFR 難易度	Descriptors
出身地（同郷かどうか）	妥当	同郷の仲間意識、共感が強まり、それによって付き合い方や言語行動（方言、人称代名詞、終結小辞）が変わる。	A1	相手の出身地を聞いて確認できる。
現住所（どこに住んでいるか）を聞く	妥当	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。	A1	相手の住んでいるところを確認できる。
休みや週末の行動などを話題にする	妥当	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮める。	A1	次の週末には何をするか尋ねて、または返答できる。
死んだ人の話題	妥当	前世、現世、来世における転生、死んだ人のために徳を積むといった仏教の世界観に基づく語彙を多用し話される。	B1	仏教の世界観に基づく表現を用いることができる。
相手の趣味や好みを探ねる	妥当	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手の距離を縮める。	A2	相手の趣味や好みを確認できる。
政治的課題	妥当ではない	昨今のタイの政治事情に鑑み、適切ではない。	---	---
家族構成などプライベートなことを聞く	妥当	具体的かつ個人的なことを聞くことで相手との距離を縮めた上で、そこで入手した情報をもとに、今後のコミュニケーションにも活用し、より良い関係構築を行う。	A1	家族構成などプライベートなことを尋ねて、または返答ができる。
愛称を使う	妥当	ほぼ全てのタイ人は生まれた時に愛称をつけられる。家族、友人だけではなく、職場でも普通に愛称が使用され、状況によっては一人称としても愛称を使うことが一般的。本名よりも愛称で呼び合う方が、距離が近い印象となる。逆に相手の愛称を聞かないと、距離を置かれている印象となる。	A1	相手の愛称を探ねて、愛称を適切に使うことができる。
親族名で呼ぶ	妥当	疑似親族意識が強く、「おばあさん」「おじいさん」「子どもたち」といった親族名を使って相手と呼ぶ範囲が広い。フォーマルで丁寧な呼称を使い続けていると、相手との距離が縮まらない。	A1	相手との心的距離を縮める適切な呼称を使える。
家族の話題	妥当	家族へ対する善行は好意的に受け止められ、話題となることが多い。	A2	家族に関する話をするすることができる。
宗教の話題	妥当	仏教を中心によく話される。特に寺で徳を積んだ経験、仏教の教え、僧侶の説話などは話題となることが多い。タイでは話し手がムスリムやキリスト教徒であったとしても、お寺で徳を積んだ話などは共感を持って、好意的に聞き入れられる。	B1	宗教、特に仏教の話題をすることができる。
王族の話題	妥当ではない	相手の見解が明確でなければ、適切ではない。	---	---

4.2.3. 配慮表現

タイ語でのコミュニケーションにおいて、距離を縮めることは重要であるが、単に距離を縮められればコミュニケーションが全て上手くいくという訳ではなく、タイ語社会・文化として守られるべき礼儀や配慮がある。例えば、すぐに勧誘や提案を受け入れるのではなく、数回遠慮した後に勧誘・提案を受け入れるのが礼儀正しい印象を与えることになる。これらの配慮に関する基本的な表現は、A1～A2 段階での学習項目として参照教材の中でも織り込み済みであるが、タイ式の配慮に関する社会・文化的背景に関する言及は教材には示されていない。

【表 6：タイ語特有の社会・文化的要素③：配慮表現】

*能力記述項目に入れる妥当性

言語行動・話題化	妥当性*	考察	CEFR 難易度	Descriptors
以前招待を受けたことについてお礼を言うか	妥当ではない	お礼は恩恵を受けた後に 1 回、大々的に言うのが一般的。	---	---
社会的立場の違いから必要な待遇表現を使う	妥当	呼称、人称代名詞、終結小辞など多岐に渡る要素により、相手への敬意や話し手自身の地位や立場を表す。	B1	自他の社会的立場に応じて適切な接遇表現を使うことができる。
慶弔や写真撮影時に席順に配慮する	妥当	年齢や社会的な立場が大きく影響。慶弔の定型表現もある。	B1	慣習に沿った表現を使うことができる。
丁寧小辞	妥当	終結小辞として、節や語の末尾につける他、単独で返事中使用し、話し手の発話を、丁寧、礼儀正しい、思慮深い、柔和といった印象を与えるものとする。そのため、自らの高い社会的地位や立場に相応しい印象を与えるためにも使用する。	A1	丁寧小辞を適切に使うことができる。
礼儀正しく、相手からの勧誘・提案を受け入れることができる	妥当	すぐに勧誘や提案を受けるのではなく、数回遠慮した後に勧誘・提案を受け入れるのが一般的。	A2	タイ的な礼儀正しさで勧誘・提案を受け入れることができる。
勧誘・提案に対して、相手が納得し易い理由で断ることができる	妥当	直接的な断り方はあまりしない。どうしても断らざるを得ない時には、丁寧に断り、謝罪した後、断りの理由を添える。納得し易い理由として、お寺に行くことや家族の事情などがある。	A2	相手が納得できる内容で勧誘・提案を断ることができる。
許容し、謝罪を認める	妥当	謝罪を受ける場合、相手側に責任がある場合であっても、まずこちら側が許すということを伝えるのが一般的な行為。	A1	相手の謝罪に適切な対応ができる。

4.2.4. コミュニケーション・ストラテジー

タイ語に限らず、各言語社会・文化には特有のコミュニケーション・ストラテジーが存在する。タイ語社会・文化においては、自他の社会的立場と距離を整理した上で、配慮表現とともに、コミュニケーションの潤滑油となるものがストラテジーである。前述の配慮表現はコミュニケーション・ストラテジーの一部と捉えられなくもないが、今回は発話者の能動的な言語行動という点で、敢えて配慮表現とコミュニケーション・ストラテジーは異なる分類としている。例えば、自分から何かを提案する際には、謙遜はあまりせずに、ポジティブな要素を全面的に押し出しながら、積極的に提案をする必要がある。1 回や 2 回の社交辞令的な遠慮を理解し、粘り強く、誠意を持って、提案し続けることが、タイ社会では求められる。タイ社会で円滑なコミュニケーションを行っていくためには、単なる語彙、文法の理解だけではなく、タイ語社会でのどのような場面でのどのようなコミュニケーション・ストラテジーが必要かを身につける必要があり、参照教材ではこれらの要素に関する表現自体は A2 レベルの段階で織り込まれているが、その背景についても示す必要があると考える。

【表 7：タイ語特有の社会・文化的要素④：コミュニケーション・ストラテジー】 *能力記述項目に入れる妥当性

言語行動・話題化	妥当性*	考察	CEFR 難易度	Descriptors
自分のことや持ち物、または食事などの招待時に謙遜表現を使う	妥当ではない	原則、謙遜とは逆にいかに素晴らしいものであるかの魅力を説明し、招待するのが一般的。	---	---
金額：値引きなど交渉する	妥当	市場等での値引き交渉は一般的。しかし、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。	A2	市場などでもものを買う時、値段の交渉ができる。
商品：代替品や品数を交渉する	妥当	市場等では一般的。しかし、定価が表示されているデパート、スーパー、コンビニ等では行わない。	A2	売買で値段以外にも数量や品目を交渉できる。
天気や気候の話題を好む（人間関係の潤滑油的 Phatic な要素）	妥当ではない	タイは 1 年を通して天気の変動が小さいことから、天気や気候の話題を話の潤滑油とすることはあまりない。	---	---
誠意を持って、相手を誘うことができる	妥当	謙遜はあまりせずに、ポジティブな要素を述べて、積極的に誠意を全面的に見せながら誘う。かつ相手側の社交辞令の遠慮を理解し、対応する必要がある。	A2	相手に伝わるように、勧誘・提案ができる。
相手や状況に応じて適切な依頼ができる	妥当	相手との心的距離によって大きく変化する。相手との距離との距離に応じて、適切な表現を使用する必要がある。	A2	相手に応じて適切に依頼することができる。
相手や状況に応じて適切な謝罪ができる	妥当	「すいません」に該当する直接的な謝罪表現だけでなく、むしろ婉曲的な表現が好まれる場合も多い。	A2	相手や場面に応じて、適切な謝罪の意を表すことができる。
相手の外見や持ち物をほめる（人間関係の潤滑油的 Phatic な要素）	妥当	社交辞令的に相手の外見で気付いた点を挨拶代わりに褒め、コミュニケーションのきっかけとする。	A1	挨拶の次に相手のことをほめることができる。

4.2.5. 文体の違い

タイ語での男女差の文体の差は終結小辞や人称代名詞で差別化を行なう程度であり、A1 レベルでカバーされている内容となっている。文体の違いという点では、単に書き言葉や話し言葉の差だけではなく、タイ語では王室や仏教に関連した語彙が多数あり、かつ生活に密着しているため、カリキュラムの中でどのように織り込むべきか、十分に考慮する必要がある。

【表 8：タイ語特有の社会・文化的要素⑤：文体の違い】 *能力記述項目に入れる妥当性

言語行動・話題化	妥当性*	考察	CEFR 難易度	Descriptors
相手との年齢差で文体を変えるか	妥当	目上の相手には、終結小辞の 1 つである丁寧小辞を使用する。年下の方は一人称も変化する。また、年上の方は、相手に気を使わせないため、カジュアルな終結小辞を使用する。	A2	相手との年齢差で文体を変えることができる。
出身地・同郷で親疎の差	妥当	同郷の仲間意識、共感が強まり、それによって付き合い方や言語行動（方言、人称代名詞、終結小辞）が変わる。	A2	出身地などを確認して親しみなどを表現することができる。
書き言葉と話し言葉の差	妥当	発音、語彙、語順などの各種要素が多岐に渡り、非常に大きく異なる。	B2	話し言葉と書き言葉が異なる場合、その文体差を表現できる。
男女差と文体・語彙の差	妥当	終結小辞や人称代名詞で差別化を行うが、語彙に大きな差はない。	A1	男女の文体の差を区別できる。
文章体で時候の挨拶文など特殊表現	妥当	文章体特有の表現や定型文がある。	B2	定型的な挨拶文や依頼文などを書くことができる。
王族や仏教特有の表現	妥当	王族や僧侶にしか使用しない語彙がある。	B2	自他の社会的立場に応じて適切な挨拶表現を使うことができる。

5. おわりに

タイ語教育への CEFR 導入に関する先行研究は非常に限られているため、日本でのタイ語教育への CEFR 導入への更なる検証のためには、現行カリキュラムレベルの適正さ、学習者としてのニーズ、東京外国語大学タイ語教育演習教材の CEFR 参照分析など、調査すべき内容が数多くある。そういった調査、分析を積み重ね、タイ語の社会・文化的特質をより具体化、指標化し、併せてタイ文字や発音といった言語的特質も系統的に織り込まれた全体カリキュラム、及び教材とその教授法が示された付属指導書の開発へつなげていく必要がある。また、日本人向けの研究成果を、日本だけに留めるのではなく、「外国語としてのタイ語教育」のグローバル・スタンダード化に向けた動きに活かすためにも、日本特有の要素と一般的な要素を常に整理しながら、研究を行っていく必要もある。先行研究も非常に限られている本テーマでは、タイ国内、及び外国の現場の第一線で活躍されているタイ語教育の専門家との情報共有とともに、タイ語よりも研究が進んでいる他言語の研究者との連携も極めて重要となってくる。

参考文献

- 拝田清(2012)「日本の大学言語教育における CEFR の受容－現状・課題・展望－」『科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究プロジェクト報告書 「EU および日本の高等教育における外国語教育政策と言語能力評価システムの総合的研究」(2012.3)』、pp.93-103.
- 石井米雄・吉川利治(編)(1993)『東南アジアを知るシリーズ タイの辞典』、同朋舎
- カノックポー・ケンチャック(1989)「タイ語と日本語の人物呼称の用法に関する対照研究」『待兼山論叢』23、pp.61-78.
- カノックポー・ケンチャック(1990)「「呼称」の対象研究－タイ語－」『日本語学』9.9、pp.59-64.
- 宮本マラシー(1989)「私と日本語・日本文化－異文化接触としての日本語学習－」『日本語学』8.12、pp.66-71.
- ソ・アルム(2014)「韓国の外国語教育及び外国語としての韓国語教育における CEFR 応用の現状に関する実態調査」『科学研究費補助金研究 基盤研究(B) 研究プロジェクト中間報告書(2012-2013) 「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究」』、pp.39-50.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2001)「間接的発話行為の考察について－理解・表現を中心に－」『三田國文』第34号、pp.56-73.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2003)「間接的発話行為における、日・タイの異文化コミュニケーション」『三田國文』第37号、pp.1-15.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2004)「日・タイの「謝罪」の発話行為から見た両国の違い」『三田國文』第40号、pp.31-43.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2006)「日本人とタイ人の「依頼」、「勧誘」行為について－対人関係を維持するストラテジーを中心に－」『三田國文』第43号、pp.15-34.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2015)「日本人タイ語学習者の発音問題と指導方法に関する一考察」『東南アジア学』No.20(2017)、pp.37-55.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2016)『表現を身につける初級タイ語』、三修社
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2017)『表現を広げる中級へのタイ語』、三修社

- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2017a)「CEFR を参照とした日本人タイ語学習者向け教材に関する考察 - 外国語としてのタイ語教育スタンダード開発に向けて -」『東京外国語大学論集』No.94、pp.169-188.
- スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン(2017b)「タイ語教育における CEFR 適用に向けたタイ語特有の社会・文化的要素に関する考察」『東京外国語大学論集』No.95、pp.233-251
- スチャーター・サッタヤポン(1992)「タイの風土・文化と日本語教育」寺村秀夫(編)『講座 日本語と日本語教育 14 日本語教授法(下)』、pp.240-256、明治書院
- 高橋清子(2005)「タイ語の配慮表現」『他言語多文化時代の文化リテラシー：配慮表現をめぐって』、pp.77-88
- 高橋清子(2014)「外国人のためのタイ語教育」における初級文法の扱い」『神田外語大学紀要』第 26 号、pp.465-488
- 富盛伸夫、ソ・アルム (2014)「非 EU 言語の学習者アンケート調査からみた CEFR のレベル設定と能力記述文の問題点—特にアジア諸語学習者の事例から—」『科学研究費助成事業基盤研究(B)研究プロジェクト「アジア諸語を主たる対象にした言語教育法と通言語的学習達成度評価法の総合的研究—成果報告書(2014)—」』、pp.113-126.
- 富盛伸夫、YI Yeong-il (2016)「アジア諸語学習者における CEFR 自己評価の傾向と社会・文化的コミュニケーション能力に関わる諸問題 —学習者アンケート調査 (2014) の分析から—」外国語教育学会紀要『外国語教育研究』No.19、pp.1-18.
- 富盛伸夫、YI Yeong-il (2017)「TUFs 言語モジュールを活用したアジア諸語の社会・文化的特質の指標化」外国語教育学会紀要『外国語教育研究』No.20、pp.207-217.
- ทองธรรม อินทจักร (2010) ความสุภาพ ความเกรงใจ และวัจนปฏิบัติศาสตร์ปลดพันธนาการ Politeness, khaam-kreeng-jai and Emancipatory Pragmatics วารสารภาษาและภาษาศาสตร์ ปีที่ 29 ฉบับที่ 1 pp.17-42.
- โรม จิราอนุกรม (1995) ภาษาศาสตร์ปฏิบัตินิยมภาษาศาสตร์เชิงสังคมวิทยา คณะมนุษยศาสตร์ มหาวิทยาลัยเชียงใหม่
- วิศนี เครือวนิชกรกุล (2004) การศึกษารูปแบบภาษานิยมในบทสนทนาภาษาไทย วารสารภาษาและวัฒนธรรม ปีที่ 23 ฉบับที่ 1 pp.44-56.
- สิริวรรณ นันทจันทุล (1995) ลีลาภาษาพูดในภาษาไทย วารสารมนุษยศาสตร์ ปีที่ 3 ฉบับที่ 1 pp.39-54.
- สิริวรรณ นันทจันทุล (1996) ลีลาภาษาเขียนในภาษาไทย วารสารมนุษยศาสตร์ ปีที่ 4 ฉบับที่ 1 pp.67-81.
- Chairerk Worapong (2010) The Instructional Context of Thai as a Foreign Language, Bachelor's Degree Programs in Thailand, *Journal of Humanities and Social Sciences*, Vol.2 (2) pp.197-226.

執筆者連絡先: sunisa@tufs.ac.jp

本稿は科学研究費助成事業基盤研究 (B)「アジア諸語の社会・文化的多様性を考慮した通言語的言語能力達成度評価法の総合的研究」(2015 年度-2017 年度、研究代表者富盛伸夫、研究課題/領域番号 15H03224) の研究成果のひとつとして公開するものである。